

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520145
研究課題名（和文） 平安前期漢文書簡の表現受容に関する史的研究
研究課題名（英文） A Historical Study on the Acceptance of Expressions in the Letters Written in Classical Chinese in the Earlier Heian Period.
研究代表者 西 一夫 (NISHI KAZUO) 信州大学・教育学部・准教授 研究者番号：20422701

研究成果の概要：

本研究課題は、平安朝前期の漢文書簡を基礎資料として、中国文学を中心とした表現受容の実態を明らかにしようとしたものである。

以上のような課題意識から導かれた成果として、以下の4点が挙げられる。

- ①文学研究・受容史研究の立場から、空海書簡の表現を検証することによって、その特色・独創性ある表現が同時代人と較べて豊かであることを実証的に示した。
- ②語彙索引と校訂本文を私家版ではあるが、完成の目途を示すことができた。
- ③文学研究の観点から分析・検証することにより、従来見落とされてきた表現から新たな書簡内容をあきらかにできた。
- ④受容史研究の観点から書簡表現に分析を加えることにより、表現受容の実態と空海独自の表現形成を跡づけることが可能となった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：漢文学

1. 研究開始当初の背景

平安初期を代表する弘法大師空海(宝亀5[774]~承和2[835])は、学問僧として中国留学を果たして真言密教をもたらし、奈良仏教から平安仏教への展開期に大きな役割を果たした。また彼は仏教のみならず、以後の日本文化・文学に多大な影響を与えている。具体的には、次の三点に集約できる。

(1) 宗教家(真言宗の開祖)：宗教研究

(2) 書家(三筆の一人)：書道研究

(3) 文人(詩人、文学理論構築)：文学研究

これらの三分野は、いずれもが中国の文化・文学を基盤として成り立ち、それを前提とした研究が積み重ねられて大きな成果を挙げている。そうした各分野の研究に共通して取り上げられる基礎資料が空海の書簡である。これは『高野雑筆集』に収められているのを中心に現在96通が知られている。これらは、従来の研究では補助的資料として位置付けられてきた。数度にわたる空海全集の刊行では書簡も取り上げられてきたものの、中心は仏教文献にあった。このような状況は、索引完備や詳細な研究と注釈が行われるなかで、書簡については索引整備も行われていない現状にあることがよく示している。

空海の全体像を明らかにする上で上記の三分野と密接に関わりながら研究の蓄積が十分でない書簡資料は、空海研究の空白地帯と言ってよい。このように書簡研究が立ち後れているのは、従来の書簡研究のあり方にその要因があるように思われる。つまり、書簡内容の事実を明らかにし、書式の分析から社会制度の実態を把握する点に主眼があった。しかも空海書簡の研究は、仏教学の立場から捉えようとするものが多く、宗教家空海の事跡研究にとどまっていると言わざるをえない。かたや文学研究や書道研究では中国文化・文学受容の観点から研究が進められており、大きな成果をあげている。このような受容史の観点から空海の書簡にも当然求められている。これによって書簡内容をより鮮明に読み取ることが出来るからである。

本研究課題が受容史の観点から書簡表現に考察を加えようとするのは、以上のような空海書簡が置かれている現状を見直し、その内容をより深く理解し、平安朝初期の中国文学受容の実態の一端を明らかにすることが可能であると考えからである。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、以下の5点に要約できる。

(1) 空海書簡の本文校訂を行い、校訂本文を作成

これまでは簡単な校異が示された状態のテキストによる読解作業が行われ、厳密な校訂作業がおこなわれていない。太田次男「高山寺旧蔵本高野雑筆集平安末鈔本について」(インド古典研究, 1984)での古写本の整理や高木神元が『弘法大師の書簡』(1981)に改訂を加えて最新の成果を盛り込んだ『空海と最澄の手紙』(1999)の中で書簡の基本資料となる『高野雑筆集』のテキスト整理が行われたことによって、本研究課題遂行の上で大きな意味を持つ。これらの成果を受けて、古写本の整理を行い校異を掲げ校訂を行って本文を確定する。

(2) 校訂本文に基づく『高野雑筆集』の索引作成

校訂を終えた『高野雑筆集』の本文によって、書簡表現の検証を進める際に必須となる索引の作成を行う。その際には掲げた校異をも検索可能な索引とする。この作業によって書簡相互の表現関係を把握することを可能になる。

(3) 表現受容のために必要となる中国書簡の本文(書儀・尺牘)整備と分析

近年、中国・台湾の研究者を中心にテキスト整備と本文研究が精力的に進められている(趙和平『敦煌写本書儀研究』1989, 『敦煌表状箋啓書儀輯校』1997, 周一良他『唐代書儀研究』1995, 吳麗娛『唐礼摭遺—中古書儀研究』2002)。これら一連の研究とテキスト整備は急速な展開を見せている一方で不備

も散見されテキストの校訂作業(趙和平『敦煌写本書儀研究』)を再検討・再校訂の必要がある(趙和平自身、その後の校訂作業と既発表校訂本文の一部訂正を併せて「《敦煌写本書儀研究》訂補」1998を公表)。これらのテキスト整理と校訂作業を通して、書儀語彙の索引増補を行う。

(4) 空海書簡の表現受容実態の分析・検討と解明

以上のような基礎作業を踏まえて、空海の書簡表現が中国の書簡表現をどのように受容し、表現を内化しているかを明らかにする。分析・検討の過程では、同一語であっても中国書簡の用法と空海書簡の用法が一致するの否かにも留意する。

(5) 中国書簡表現の実態把握

受容研究の立場から、空海の書簡に影響を与えている中国書簡表現の実態を明らかにする。中国・台湾での研究は本文校訂や制度史研究に主眼があり、表現研究としては成熟していない。この状況を打破するために、基本作業の過程で作成・増補した語彙索引を利用して中国書簡表現(書儀・尺牘)の特質を明らかにする。この作業によって(4)での分析・検討結果を補強することになる。

3. 研究の方法

本研究課題は2年の研究期間を3期6項目に分割して遂行した。

(1) 【平成19年度前期】：空海書簡の本文校訂と中国書簡例文集(書儀)の校訂作業

①空海書簡の本文校訂

太田次男「高山寺旧蔵本高野雑筆集平安末鈔本について」と高木伸元『空海と最澄の手紙』で整理された空海書簡の基本資料となる『高野雑筆集』の古写本を収集整理し、96通の書簡毎に本文校合をおこない、校訂本文を作成する。その際、『高野雑筆集』に限定せず、書道研究の対象となっている書簡本文も

資料として採用する。これらの資料を書簡毎に対照表としてまとめる。次に収集した本文を分析・検証するためにコンピュータでデジタル本文にする。このデジタル本文を索引作成のためにデータベース化する。資料間での校異については、デジタル本文として参照可能な処理をおこなう。

②書簡例文集(書儀)の校訂

中国・台湾の研究者による校訂成果を参照しながら、これまでに進めてきた校訂作業と語彙索引の増補のための準備作業をおこなう。書簡例文集(書儀)は翻刻された資料を基本にしなが、写本(敦煌文書)と対照しながら作業を進める(敦煌文書の必要性については藤枝晃『敦煌学とその周辺』(1999)に分かり易くまとめられている)。これは空海書簡の本文校訂の場合に同じく、漢字の異体字・俗字などを、どのように処理するかが本文校訂の際に重要になるからである。漢字の異体字等については、専用ソフトを活用する(今昔文字鏡)。

(2) 【平成19年度後期～平成20年度前期】：校訂本文に基づく空海書簡の語彙索引の作成と「書儀語彙索引(私家版)」の増補改訂

③「弘法大師空海の書簡(本文と索引)」の作成

平成19年度前期の基礎作業として遂行してきた空海書簡の校訂本文を用いての索引の作成である。索引はデジタル本文を用いて語彙索引を作成する。総索引ではなく語彙索引の作成をおこなうのは、本研究課題が表現の受容史研究に主眼を置くからである。

④「書儀語彙索引(私家版)」の増補改訂作業

中国・台湾の研究者によって進められてきた書儀本文の校訂作業と近時の研究成果を受けて、これまでに進めてきた「書儀語彙索引(私家版)」の増補改訂をおこなう。写本間で異同が認められる本文の処理などを相互

参照するなど、索引としての機能を強化し表現研究の根幹を固める。

また本文校訂の際に留意している異体字・俗字についても参照項目として検索可能となるような工夫を施す。

(3) 【平成 20 年度後期】：研究課題の解明に向けた考察と報告

⑤空海書簡の表現分析とその特質の解明

①・③の本文並びに索引の作成作業に基づいて空海書簡の表現分析と検証をおこなう。特に空海書簡相互の表現と、同時代人で空海と同じく中国への留学経験を持つ最澄の書簡表現とを比較対照する。空海の書簡表現分析のみならず、最澄の書簡表現と比較することによって、類似関係や相互の独自表現を浮き彫りにすることが可能となる。

⑥書簡表現の受容史的観点による表現分析

中国書簡例文集(書儀)と空海書簡との表現受容の観点に立つ分析をおこなう。空海書簡に見られる独自表現を中国の書簡例文集(書儀)からの受容史的観点で分析し、その特質をあきらかにする。その際、受容史的な考察では表現や語句の意味を明らかにするにとどまらず、それぞれの表現や語句が内包している語の性格(語性)に留意した分析・検証をおこなう。

このような書簡表現の独自性の検討では、書簡語彙の性格(語性)が注目されており、研究成果をあげている(福本雅一責任編集『法帖大系 淳化閣帖』全 10 巻, 1980 年～)。そのような成果を有効に活用する。

4. 研究の成果

本研究課題に拠って得られた研究成果は、以下に示すように 2 点 2 項目の独自の表現解析と 2 点 2 項目の文学研究的な意義を得た。

(1) 表現解析による独自の表現の解析

①空海の書簡研究は常に仏教学の立場から進められてきた。本研究課題はこれと異なり、文学研究・受容史研究の立場から書簡表現に着目して、空海書簡の表現を検証することによって、中国文学受容の実態に照らしてその特色・独創性ある表現が同時代人と較べて豊かであることが語彙の検討を通して実証的に示した。

②空海研究の基礎資料でありながら、本文校訂や索引整備が遅れていたのが書簡資料であった。そうした状況を打破する契機となし得る索引と校訂本文を私家版ではあるが、完成の目途を示すことができた。

(2) 文学研究的意義

①文学研究の観点から書簡表現を分析・検証することにより、従来の研究では見落とされてきた表現から新たな書簡内容をあきらかにできた。

②受容史研究の観点から空海書簡の表現に分析を加えることにより、表現受容の実態と空海独自の表現形成を跡づけることが可能となった。

なお、成果報告書として

「弘法大師空海の書簡[本文と語彙索引]」

「敦煌文書書儀語彙索引」

を作成した(いずれも私家版)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①西一夫、書儀・尺牘の受容—起筆・擱筆表現を中心に—、萬葉集研究、第 30 集、2009 年 6 月刊行予定、査読無

②西一夫、萬葉後期の狩りの歌—一家持の「詠—白大鷹—歌一首」をめぐって—、四季の万葉集(高岡市萬葉歴史館叢書)、235-257 頁、

2009年、査読無

- ③ 西一夫、奈良朝後期漢文書簡表現攷一「謹上」と「謹状」の用法を中心に一、研究紀要（長野県国語国文学会）、第7号、18～24頁、2008年、査読無
- ④ 西一夫、古典教育における『伊勢物語』作品研究一第84段「さらぬ別れ」の表現分析一、人文科教育研究（人文科教育学会）、第34号、11～22頁、2007年、査読有

〔学会発表〕（計 5件）

- ① 西一夫、萬葉後期の狩の歌一越中の家持一、信州平安文学研究会12月例会、2008年12月13日、上田女子短期大学
- ② 西一夫、奈良朝後期漢文書簡の表現一萬葉集所載書簡を中心に一、第17回信州大学国語教育学会大会、2008年11月18日、信州大学教育学部
- ③ 西一夫、萬葉集の書簡表現一贈答の次第を表す表現を中心に一、筑波大学日本語日本文学会第32回大会、2008年9月20日、筑波大学
- ④ 西一夫、吉田宜の歌と書簡文一「片紙」に記された思い一、美夫君志七十周年記念全国大会、2008年7月6日、中京大学
- ⑤ 西一夫、奈良朝後期漢文書簡の表現一萬葉集所載の書簡表現を中心に一、上代文学会1月例会、2008年1月12日、二松学舎大学

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 一夫(NISHI KAZUO)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：20422701